



危機に瀕するイスラーム法学者の統治

松永泰行

二〇〇九年六月一二日に投票が行われたイランの第一〇期大統領選挙のプロセスおよびその結果を巡り、一般国民の一部をも巻き込む形で展開している一連の抗議行動には、大きく分けて、体制指導部および体制派の政治エリートのレベルで展開しているダイナミクスと、ムーサヴィー候補を支持することでアフマディーネジャード政府やその背後にいる体制指導部に対する異議および抗議の意思表示をしている一般国民レベルでのダイナミクスが存在している。これらの異なるレベルで同時進行的に展開しているダイナミクスの間に関連性はあるものの、関係する主体間の力関係の構造が異なるため、分析的には独立的なものであると見なすことが有効である。本小論では、前者のレベルに焦点をあて、今回の選挙をめぐる一連の展開の中で最高指導者ハーメネイーがとった行動と、それがイラン政体のイスラーム法学者の統治体制としての側面の今後に対するインパクトを中心に若干論じてみたい。

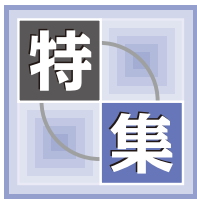
●節目の年に行われた大統領選挙

今回の大統領選挙は、一九七九年二月のイラン・イスラーム革命から三〇年、一九八九年六月のホメイニー師の死去に伴いハーメネイー師が最高指導者に就任してから二〇年が経過した、いわば節目の年に実施された。革命から三〇年が経過した点は、政治エリートのレベルにおいては、革命の成功に寄与し、革命直後期からイラン・イラク戦争期に中心的に活躍した革命功労者世代が高齢化し、政治的にも周縁化される一方で、イスラーム革命体制樹立には直接貢献しなかったものの、その後の体制の維持運営に参画することで育ってきた革命二世代の政治的台頭という大きな世代交代の流れとして顕在化している。また、ハーメネイー体制成立から二〇年という背景は、最高指導者就任時に確固とした独自の支持基盤を持たなかったハーメネイー師が、最高指導者の任命権を通じたネットワークの整備および独自の政治路線を打ち出すことで築き上げた支持基盤が、ようやく、自らに適用する大統領候補者を当選させるにあ

たって恒常的に効果を発揮するようになった点と、かかわっている。

今回、再選された現職のアフマディーネジャード大統領は、一九七九年の革命当時には大学生であり、二〇〇五年の第九期大統領選挙で当選するまで、中央政界に全く関わりを持っていなかった点から明らかとなり、明らかに革命二世代に属している。残りの三候補（ムーサヴィー、キャッルービー、レザイー）は全て、革命直後期から有力ポジションを歴任した革命功労者世代に属していた。

革命から三〇年が経過したことは、国民レベルでは、一九七九年の革命を直接経験していない革命後世代が絶対多数を占めていることに表れている。このことは、選挙の際にはこれらの旧世代の政治エリートにとって、基本的にマイナスに働くものである。今回の選挙では、現職に対する中心的な対抗馬となったムーサヴィーが、例外的に都市部において若者や一部の中産階級の支持を集めた。しかしその背景は、現アフマディーネジャード政権の政治的志向性や経済的および文化・社会的諸施策に対する



彼らの反感（これは投票になどそもそも行かない層や在外のイラン人がもつ、イスラーム革命体制全体に対する反感とは異なる）にあり、元首相あるいはハータミー系改革派としてのムーサヴィーの知名度や資質とは関わりをもつものではなかった。

そもそもイランの現体制下においては、国家の諸機関を後ろ盾にした（公式・非公式の）選挙運動を実施できる強みを持つ現職の再選がありうる第一期終了時の大統領選挙は、今回の選挙の前後に顕在化したように、大きな政治的亀裂を生む契機とはなりにくい。それにもかかわらず今回の選挙では、二つの側面で通常とは異なる展開が見られた。ひとつは、ムーサヴィー候補支持派の一部の国民（「緑の波」運動）による選挙後の抗議行動の継続であるが、ここではその詳細には立ち入らない。

●選挙の前後に顕在化した政治的亀裂

もうひとつの通常と異なる展開は、体制支持派の政治エリート層内部における幾重にもわたる亀裂の顕在化である。ハータミー前大統領やその支持者など（政党レベルでは、闘う聖職者集団、イラン・イスラーム参加戦線党、イスラーム革命モジャハーヘ・デイン機構など）からなる、いわゆる狭義の改革派（ハータミー派、あるいは参加戦線派と呼ばれる旧イスラーム左派勢力）は、今回、ムーサヴィーを候補者として選

挙プロセスに参加させることには成功した。しかし、政治勢力として、ハータミー政権の第二期目より政治的に周縁へと追いやりていたため、彼らが今回の選挙の前後に重要な役割を果たせなかったことは驚くべきことではなかった（それにもかかわらず、選挙後に逮捕・投獄および訴追の対象にされているのは、まさに周縁化の過程そのものにすぎない）。

広義の改革派の一翼を担うキャッルービーは、前回の大統領選挙敗退後に自らの政党（国民信託党）を設立し、今回はキャッルーバスター、アブデイー、アブタヒーなど一部の旧ハータミー派エリートの支持・協力を得たが、選挙期間中に有権者レベルでは全く支持を広げることができなかったが、これも全く予想通りであった。

その一方で、公益評議会と指導部専門家会議という二つの国家機関の長を務めるラフサンジャーニー元大統領が政治的に周縁化された過程は、おおいに注目に値する。選挙運動期間中の本年六月初め以来のラフサンジャーニーに対する政治的弾圧は、(一)アフマデイーネジャード大統領が候補者間の国営放送での公開討論の一環としてそれを先導、(二)革命防衛隊とそれに連なる諸団体（ファールス通信社など）を含む同大統領の支持勢力がそれを増幅、(三)ハーメネイー最高指導者が選挙後の金曜礼拝（六月一九日）でそれらを容認・擁護する姿勢を示す、という流れで展開し

た。とりわけ、ハーメネイー最高指導者のアフマデイーネジャード大統領に対するその信認の意思表示は、同大統領が聖職者および革命の功労者世代への敬意の欠如を前面に出すことで、イランの一般国民多数の間に蔓延する特権階級化した聖職者に対する反感を選挙戦の道具とした直後に、対抗馬の三候補だけでなく、ラフサンジャーニーのものとは比べても、同大統領の政策姿勢や見解が「自らのものに最も近い」と公言したものであった。

その後、一カ月間沈黙を保っていたラフサンジャーニーが、七月一七日にテヘランの金曜礼拝導師を務めると、そこでの「選挙結果に対する疑念が存在する」との発言を巡って再燃した同師への攻撃は、指導部専門家会議の副議長でコム神学校教員協会会長を務めるモハンマド・ヤズデイー師による公然批判（七月一八日）、モハンマド・タギー・メスバーフ・ヤズデイー派聖職者からラフサンジャーニーに対する失脚（「モンタゼリーと同じ末路」）を暗示する脅し（七月二二日）、指導部専門家会議多数派による最高指導者の見解へ従う必要性に関する声明文（七月二三日）、監督者評議会書記で現大統領支持者のジャンナテイー師による金曜礼拝での公然批判（七月三二日）と、雪崩のように積み重ねられた。

●イスラーム法学者統治体制の危機

これらの展開が、なぜイスラーム法学者



統治体制の危機といえるのであろうか。これまでも、革命体制を支持する聖職者の中で深刻な内部対立があり、聖職者特別法廷や国家安全保障会議などの決定に基づき、幾名もの有力聖職者が公職・教職からの追放、逮捕・投獄や自宅軟禁などの様々な制裁の対象とされてきた。ではなぜ今回の亀裂の顕在化が、今までになく深刻なものといえるのであろうか。

その理由は、これらの展開が、革命功労者世代と革命第二世代の間の世代交代とそれに伴う実権を握る勢力の非聖職者化という大きな流れを背景としている点にある。それゆえ、これらの展開は、政治的に周縁化された改革派の政治エリートだけでなく、保守派側の旧世代体制派エリートの間においても少なくない危惧を抱かせる形で進んでいる。もともと、後者の危惧は、最高指導者の権威を支える必要性が表向きは優先されるため、その大半が現在までのところ表面化するには至っていない。しかしながら、ハーメネイー最高指導者が自らの主要な支持基盤とし、政治プロセス的に依拠している政治勢力の内、ジャンナティーやヤズデーイなど旧世代の保守派体制派エリートの輪が急速に収縮している一方で、革命防衛隊やそれに連なる一部

の右派聖職者（メスバーフ・ヤズデーイ派および革命防衛隊内部の強硬派聖職者など）の役割が日々強まっている点は見逃しえない現実であり、まがいなくハーメネイー最高指導者の自覚的な一連の選択がこのプロセスを推し進めている。

すでに、ハータミー政権第二期（二〇〇一〜〇五）より、革命防衛隊関係者の中には、イスラーム革命体制の護持を至上目的化し、「腐敗した」イスラーム聖職者をその目的にとつての障害物として議論する者もあらわれていた。二〇〇五年のアフマディネジャード政権の成立は、（もちろん全て計算づくの結果ではないが）ハーメネイー最高指導者が、一九九二年に欧米の「文化侵略」からイスラーム革命体制を護持するとスローガンを掲げ、革命防衛隊およびパシジ抵抗軍を自らの支持基盤として育てる路線を選択した延長上に、実現したものであった。アフマディネジャード政権下で進められた様々な人事や制度改革に見られるとおり、政治的に（さらに経済・文化・教育・メディアの分野においても）台頭してきたこれらの革命第二世代の勢力の、世代交代と実効的プロセスの非聖職者化への意図は見逃しえないものがある。

したがって、そもそも政治的には現職の再選が予期された今回の大統領選挙は、これらの新興勢力にとつては、旧世代の反対派勢力（これには、広義の改革派やラフサンジャニーらだけでなく、アフマディ

ネジャード政権成立後に淘汰されたモヴァッヘディー・ケルマニー前革命防衛隊における最高指導者名代などの旧世代の保守派をも含む）を政治プロセスから除去するための格好の機会を提供するものであった。それゆえ、今回の選挙が、短期的にはハーメネイー最高指導者にとつて、就任から二〇年目という節目の年の大統領選挙における自らが支持する政治勢力を再確認する機会を提供したとしても、中長期的には、ハーメネイーやその取り巻きの旧世代聖職者にとつての勝利とはとうてい言い難いものであった。前述の革命防衛隊内部に存在する非聖職者化の志向と、ハーメネイー師の後継最高指導者（その適当な候補さえも）が不在であることを加えると、イラン政体のイスラーム法学者の統治体制としての側面は危機に瀕していると言わざるをえない。

（まづなが やすゆき／東京外国語大学 学准教授）